2013 年 4月 10日

公益財団法人　笹川記念保健協力財団
理事長　紀　伊　國　献　三　殿

施設名

宗教法人 在日本南プレスビテリアンミッション
淀川キリスト教病院

代表者　総長 椋　棒　正　昌　印

２０１２年度ホスピス緩和ケアナース養成研究事業助成
に係る報告書の提出について

標記について、下記のとおり報告いたします。

記

１　研究・研修事業　　２０１２年度ホスピス緩和ケアナース養成研究事業

２　期　　間　　２０１２年　４月　１日　～　２０１３年　３月３１日

３　報　告　書　　Ⅰ　事業の目的・方法

Ⅱ　内容・実施経過

Ⅲ　成果
（上記Ⅰ～ⅢをＡ４縦判・横書 6,000字程度にまとめる）

Ⅳ　収支報告
①助成金の主な使途（人件費以外は領収書等の証憑書類を添付）
②当該助成金に関わる部分の決算書「写」
（貴機関の全会計決算書でなく、当該助成計上部分のみで可）
＊決算期の関係で２０１３年３月１８日（月）までに「写」を提出できないときは提出予定日を記入
（提出予定日：２０１３年　　月　　日）

Ⅴ　添付書類
当該施設の研修カリキュラム（パンフレットでも可）

Ⅰ．事業の目的・方法

１．目的

近年、ホスピス・緩和ケアについて社会の関心も高まり、わが国の承認緩和ケア施設も年々増加してきている。さらに2007年4月からの「がん対策基本法」施行に伴い、全国に多くの緩和ケアチームが作られ、同時に、がん看護専門看護師や、がん性疼痛看護、緩和ケア、がん化学療法などの認定看護師の育成にも関心が寄せられている。これらの流れとともに、ホスピス・緩和ケアに携わる看護師の専門的スキルやケアへの期待は高まっている。

こうした現状を背景として、特に、臨床実習に重点をおいた専門的な訓練を実施し、その実際からホスピス・緩和ケアの基本的理念や知識・技術・態度を学び、より質の高いホスピス・緩和ケアが提供できるナースを育成することを目的として、財団法人笹川医学医療研究財団からの助成により1999年度より「ホスピス緩和ケアナース養成研究事業」を行っている。

２．方法

ナースのためのホスピス緩和ケア研修のプログラムの一環として、日本看護協会から決定された研修生に対して、看護部が窓口となり、研修案内を送付した。

Ⅱ．内容・実施経過

１．内容

(1) 研修の目的

①ホスピスおよび緩和ケアの理念を理解し、実践を通してホスピスおよび緩和ケアに必要な知識・技術・態度を習得する。

②チームアプローチの実際を学び、チームの中でのナースの役割を理解する。

③自施設において、ケアの実践のための具体策およびナースとしての役割が考えられる。

(2) 研修期間

原則として3週間

(3) 研修プログラム

第1週　・研修の目的、目標を明確化する。

・8月～10月：担当看護師とともに行動し、一般病棟における緩和ケア対象患者の1日および1週間の流れを知り、一般病棟における緩和ケアを必要とする患者の特徴を理解する。

・12･1月：担当看護師とともに行動し、ホスピスにおける1日および1週間の業務の流れを知り、ホスピスの特徴を理解する。

・入院受け入れの見学をし、プライマリーナースの役割について学ぶ。

第2週　・担当看護師とともに行動し、日常生活の援助、症状マネジメントについて学ぶ。

・家族面談や看取り前後のケアの実際を学び、家族・遺族ケアの必要性につい

て理解する。

・チームでの情報共有の仕方やカンファレンスの持ち方について学び、チームアプローチについて理解する。

第３週　・ボランティアの役割を学び、多職種との連携について理解する。（ボランティア研修）

・緩和ケア対象患者の入院相談からホスピスへの転院もしくは退院後のフォローアップ体制等を学び、対象患者の継続ケアについて理解する。（外来見学、訪問看護カンファレンス見学、緩和ケアチーム回診見学）

※中間振り返り（第２週目週末）：研修担当者とともに、前半の研修を振り返り、後半の研修目標、内容を修正し、再確認する。

※まとめ（第３週目週末）：研修の振り返りおよび評価の面接を行い、今後の課題を明確化する。自己の研修課題に沿ってレポートを提出する。

２．実施経過

前述した内容で研修を実施した。＜まとめ＞に関しては、研修担当者の面接およびカンファレンスの時間を利用し、スタッフとの意見交換の場を持つと同時に、看護部の教育担当課長が面接を行い、研修が円滑に行われていたかを評価した。その結果、日本看護協会からの研修生９名全員が研修を終了し「実習修了書」を発行した。

Ⅲ．成果

成果については研修生の実習報告書とレポートより報告する。

１．実習形態について

① 実習期間について、７名が「適当」、２名が「長い」と回答していた。長い理由は特に記載はなかった。しかし、「最初は長いと感じたが、2～3週間でいろいろ学ぶことができた」や「３週間の実習期間は、外来やチーム回診などいろんな立場で看護師の役割を知ることができた」との意見もあった。今回は前半のグループが一般病棟での学びと言うこともあり、外来や緩和ケアチーム回診など、緩和ケア対象患者を広く見ることができたと思われる。１週目は環境や業務の流れを知りホスピス・緩和ケアを幅広く捉え、２週目以降の学びを深めていくためにも３週間は必要な期間であると思われる。

② 実習時期については、９名全員が「希望通り」と回答していた。講義に引き続いて研修した研修生、研修までに時間が経過した研修生共に、自施設での問題や自己の課題に向き合い目的を持って実習に臨み、講義内容と実践を結び付けられるよう取り組んでいた。

③ 実習プログラムの内容については、研修生全員が「大変良い～良い」と回答していた。外来見学や訪問看護師との連携・ボランティア研修・カンファレンスへの参加を通して、他職種との連携・チーム医療を学ぶことができたとの意見も多く、プログラムに対する満足度は高いと思われる。

④ 受け入れ体制については、「学びたい内容を確認し、可能な限り調整してもらえた、きちんと説明してもらえた」とあり、全員が「大変良い～良い」との評価であった。

⑤指導体制については、「わからない部分に丁寧に教えていただいた」・「毎日の研修カードで振り返りをしてもらい、学びを得ることができた」と感想があり、全員が「大変良い～良い」と回答していた。

２．実習目標の評価

実習方法は、３週間を通し、日々の担当看護師と共に患者を受け持ち、見学を基本としてケアに参加できるようにした。ボランティア研修、外来見学、訪問看護師とのカンファレンス、緩和ケアチーム回診見学については、２週目と３週目に分けてプログラムに組み入れた。研修生に対して、毎日の研修内容と考察について当院独自の研修レポート用紙への記入を依頼し、提出されたレポートには後日担当看護師からコメントを返すようにした。必要に応じて文献の紹介や、病棟および院内の勉強会などに自由に参加できるようにした。

日々の担当看護師で不十分な点や困っていることなどは、研修担当者が適宜確認するようにした。２週目の終わりに中間評価を行い、個々の課題に対して経験できていないことはないかを確認し、可能な範囲で調整を行い、最終日にはまとめの評価を行った。

個々の目標についての評価は、多くの研修生が目標として挙げていた項目について、以下に述べる。

① 緩和ケアを行う看護師の役割について理解する

「患者・家族の症状の受け止め方や理解度に合わせた面談を適宜行い、今後の過ごし方について具体的にイメージし、その人らしく生きることを支えていく」・「各スタッフとの連携の必要性を強く感じた」・「自分本位なケアをしていることに気が付いた」・「人生の最期の時期を生きる人の苦痛が取り除かれ、良質の日常生活が維持されることによって、自らの人生最後の生をその人らしく生き抜くことができるように専門的に関わり実施する看護援助であり、家族に対しても必要な援助を行うことが実際に学べた」などの感想から、全人的ケアの実践の重要性を理解し、多くの研修生が実習を通して自己のケアや患者と向き合う姿勢について振り返りながら学びを深めていた。

② チーム医療について理解する

患者・家族との関わりにおけるケア・治療、コミュニケーションや様々なカンファレンスの場面を見学し、ほとんどの研修生がチームアプローチの重要性について理解できたと評価していた。「毎日のカンファレンスやチーム方向検討会に参加し、進行方法や看護スタッフの着眼点などを学ぶことができた」・「多職種が連携してケアについて話し合ったり、在宅療養に向けた調整を行っていた」・「多くの視点から考えることで、患者のQOLを改善するためのアプローチができる、より患者の思いに近づくことができることがわかった」・「チームアプローチの中で自分が果たす役割に気づくことができた」・「チームを組んでその人のより良き人生のゴールに向かって最大の努力を発揮されている」・「話し合うことの意味について考えることができた。・・今何が問題なのかを明確にできることを学んだ」などの感想も多く、患者を支えるチームアプローチや各カンファレンスの持つ意味やその重要性を学ぶことが出来たと思われる。その中で、ナースの役割としてどのように専門性を発揮すべきかを考えたり、話し合いを持つ機会を増やしたいなど自施設において可能な取

り組みを具体的に考えることが出来ていた。

③ 緩和ケアの実際を知る

「死と向き合って生きる患者は、全人的苦痛（身体的・心理的・社会的・スピリチュアル）を感じており、全人的な視点からのケアが必要で、患者の視点を重視した決定を行うために情報収集カンファレンスを重視している。患者さんに寄り添う看護を重視している」・「環境面において、生活の場としての癒し・おもてなしという観点からの配慮が理解できた。環境調整がただ整理整頓するのではなく、生活行動を考え、その必要性・意味を考慮して行うものであることが理解できた。」・「症状コントロールやケアに対する様々な新しい知識・工夫を学ぶことができた。患者のペースに合わせていくことの重要性を再認識することができた。」等、患者を全人としてとらえる視点を重視して具体的な行動を行っていることが伝わっていると思える内容もあった。

＜まとめ・今後の課題＞

今年度も、当院独自の研修レポートの提出を毎日依頼し、実践と考察、感想に対して担当者がコメントを返すようにした。レポートは、日々の振り返りや考察などの学びが積み重なり自己の資料となっているようであった。また、日々の担当看護師とゆっくり意見交換できない場合でも、レポートが情報交換や意見交換を行うよいツールとなっており、疑問点の解決やより深い学びとなっていると感じられた。また日々の担当看護師自身も、自己の看護について振り返る機会となり、指導を通して新たな学びにつなげることができ、双方にとって意義のあるものになっていると思われる。

実習プログラムの内容については、当院が７月に移転し、ホスピスが別棟に改築中という時期も重なったため、8 月から 10 月の研修生に対しては緩和ケア対象患者が多く入院する一般病棟で研修を行った。そのため、緩和ケア病棟での研修という形ではなかったことで残念と思った者もおり、申し訳なく思ったが、逆に一般病棟の中での緩和ケアを模索している研修生にとっては非常に学ぶところが多かったという意見もあった。12 月・1 月の研修生は新しくオープンしたホスピスでの実習となったが、平均在院日数が 15～16 日と以前に比べて短いこともあり、非常に看護の展開が早い中での実習となり、指導者側も追いついてくのがやっとで、戸惑ったことも多かったかもしれないが、実習のレポートを読む限り、それぞれに学びが多く、自病院での課題を発見して帰られたのはありがたいと思う。

研修生は、昨年同様一般病棟で緩和ケアに関心を持ち勤務する人や、緩和ケア病棟立ち上げの役割を担って実習に臨んでいる人、実際に緩和ケアチームに携わっている人など、置かれている立場やニーズは様々であった。その中でも、ホスピス・緩和ケア研修を通し、「教科書や理論だけでは得られない、現場での実際を見て、感じ、聞くことができ多くの学びを得ることができた。自分の未熟さや反省すべき点もたくさん気づかされる実習でした。」・「看護の基本を再確認する貴重な機会を与えられた。」・「患者中心の医療の提供について再度考えさせられることがとても多かった。」など、研修を通して自己のケアを振り返り、看護観や自己を見つめ直す機会となっているだけでなく、新たな課題を明確にしている研修生も多く、貴重な体験になっているように思われる。

今年でこの研修は修了すると聞いているが、今後も質の高いホスピス・緩和ケアを実践できるナースの育成に向けて努力していきたい。